

アメリカ大統領のアイランド訪問の意義

法学部政治学科 4年 中野 翼

1. はじめに
2. 本研究の問いと仮説
3. 本研究の意義
4. 第 35 代大統領ジョン・F・ケネディについて
5. 第 37 代大統領リチャード・ニクソンについて
6. 第 40 代大統領ロナルド・レーガンについて
7. 第 44 代大統領バラク・オバマについて
8. おわりに
9. 参考文献

1. はじめに

アメリカ合衆国には、多くのアイランド系アメリカ人が居住している。2015 年に実施された American Community Survey (ACS) では、自らを Irish American と申告したアメリカ人は約 3,352.6 万人である。そして、アイランド系アメリカ人は全人口の 10.6% を占める集団となっている。また Scotch-Irish American であると申告したアメリカ人は、約 300 万人であり、全人口の 1.0% を占める。

本論文では、現在のアイランド共和国に出自を持つことから、Irish American と Scotch-Irish American を合わせて、アイランド系アメリカ人と定義する。出身国別に見た場合、アイランド系は、ドイツ系の 4,640.3 万人 (14.7%) に次ぐ割合である¹。また、歴代の合衆国大統領に着目すると、2017 年 2 月現在の全 45 代 44 名の大統領の

¹American Community Survey 5-Year Estimates, United States Census Bureau.
<<https://factfinder.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?src=bk mk>> (参照 2017/2/2)

うち、22名がアイルランド系に出自を持つ大統領である²。表1にあるように、最初のアイルランド系の大統領は、第7代のアンドリュー・ジャクソンであり、彼は、Scotch-Irish American であった。

アイルランド系アメリカ人の多くは、18世紀から19世紀にかけて、産業革命やアイルランド本国でのジャガイモ飢饉をきっかけに、アメリカ大陸に移住してきた。移住当初は、多くがカトリック教徒であったアイルランドからの移民は、イングランド出身者やプロテスタントが主流の社会において迫害の対象であった。そのため、彼らは、都市部において工場労働者、消防士、警察官、軍人などの危険な職業に従事することを余儀なくされることが多かった。しかしながら、アイルランド系がその数を武器に、次第に大都市などの地方政治へと進出し、マシーン政治を展開するようになると、WASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）の反発はさらに強まる³。

アメリカ社会において、アイルランド系アメリカ人に対する差別感情が払拭されたのは、第35代のジョン・F・ケネディの登場がきっかけだとする先行研究が多い。彼は、アイルランド系であり、さらに、カトリック教徒であるという非常に大きなハンデを背負いながらも、大統領に選出された。アメリカ史上初のカトリック教徒の大統領でありながら、歴代の中でも最も人気のある大統領の一人となった⁴。そして、ジョン・F・ケネディ以降の大統領は、自らがアイルランド系であると積極的に主張するようになる。

本稿は次のように構成される。第2章において、本研究の問いと仮説を提示する。次に、第3章において本研究の意義を述べる。そして、第4章はケネディ、第5章はニクソン、第6章はレーガン、第7章ではオバマをそれぞれ扱う。そして、第8章で結論を述べ、本稿を締めくくる。

² "U.S. Presidents with Irish Roots, Irish Fireside."

<<http://irishfireside.com/wp-content/uploads/2010/08/PresidentialTrail.pdf>> (参照 2017/2/2)

³ 西山隆行 (2016) 『移民大国アメリカ』 筑摩書房

⁴ "Washington, Lincoln Most Popular Presidents: Nixon, Bush Least Popular, Rasmussen."
<http://www.rasmussenreports.com/public_content/politics/people2/2007/washington_lincoln_most_popular_presidents_nixon_bush_least_popular> (参照 2018/2/2)

2. 本研究の問いと仮説

大統領が任期中に外国を訪問するのは、第26代のセオドア・ローズヴェルト大統領が1906年にパナマを訪れたのが最初である⁵。それ以降の大統領は、アメリカの強い影響力下に置かれていた中南米諸国や、古くから関係が深かったヨーロッパの主要国を中心に訪問してきた。

しかしながら、ジョン・F・ケネディが初めて大統領としてアイルランドを訪れて以降、6名の大統領が合計で8回もアイルランドを訪問している⁶。そして、非常に興味深いのが、アイルランドを訪問した大統領のすべてが、アイルランド出身の祖先を持っているということである。さらに、ジョン・F・ケネディ、リチャード・ニクソン、ロナルド・レーガン、バラク・オバマの4名の大統領は、短期の滞在であるにも関わらず、自らの祖先や親戚が住んでいた街まで訪問した。

そこで、本研究では「国際政治上の影響力が弱く、通商上の重要性も低いアイルランドを、大統領が度々訪問し、わざわざ自身の祖先の故郷まで訪れるのはなぜだろうか。」という問いを立てる。それぞれの大統領のアイルランド訪問には、政治的な動機が隠されていたのか、それとも単に個人的な思い入れに基づいたものなのか。本研究では、この問いに答えることを目指す。そして、本研究では「大統領はアイルランドを訪問することで、アイルランド系アメリカ人の票を獲得することを目指していた。」という仮説を立てる。

この仮説の妥当性を検証するため、本研究では4名の大統領によるアイルランド訪問を扱う。その4名とは、自らの祖先の故郷を訪問したジョン・F・ケネディ、ロナルド・レーガン、バラク・オバマの3名と、妻の祖先の故郷と自身の祖先の墓を訪問したリチャード・ニクソンである。

ビル・クリントンとジョージ・ブッシュを本研究の対象から除いたのは次の理由からである。クリントンに関しては、当時緊迫していた北アイルランド問題に絡んだ訪問で

⁵ U.S. Department of State, "Presidential Visits Abroad." <<https://2001-2009.state.gov/r/pa/ho/trvl/pres/c7383.htm>> (参照 2018/2/2)

⁶ Office of the Historian, Department of State, "Travels Abroad of the President." <<https://history.state.gov/departmenthistory/travels/president>> (参照 2017/2/2)

あり、ブッシュは、アイルランドで開催されたサミットへの出席のための訪問であったからである。

3. 本研究の意義

本研究では、大統領のアイルランド訪問の意味を明らかにすることを目指す。本稿では、それぞれの大統領が、次期大統領選挙においてアイルランド系アメリカ人の票を獲得することを目指し、アイルランドを訪問していたことを明らかにしていく。

アメリカにおいて、一つの国を訪問することが、大統領選挙の結果に有利な影響を与える可能性を持つ国は、アイルランドしかないだろう。それは、第1章で述べたように、アイルランド系アメリカ人がアメリカで2番目に大きな民族集団であることや、古くから地方政治や連邦政治における影響力が強かったことに起因する。

そして、アイルランド系アメリカ人に、それぞれの大統領がアイルランド系と深いつながりを持つことをアピールする手段として利用されてきたのが、大統領任期中のアイルランド訪問であったことを本稿では明らかにする。

本研究の意義として、歴代大統領がアイルランド訪問を選挙への動員手段の一つとして用いてきたことを明らかにすることが挙げられる。大統領の外国訪問は多くの国の場合、外交問題や通商問題の解決のため、国際会議への出席など様々な理由に基づく。しかしながら、本研究では、多くの場合、大統領のアイルランド訪問は、次期大統領選挙へのアイルランド系アメリカ人動員のためという目的でなされてきたことを明らかにする点で極めて大きな意義を持っている。

4. 第35代ジョン・F・ケネディ大統領

ケネディは、カトリック教徒であるという大きなハンデを背負いつつも、1960年の大統領選に勝利した。そして、1963年6月、彼は現職の大統領として初めて、アイルランドを訪問した。彼はアイルランド滞在中に、祖先の故郷があるアイルランド東部のウェックスフォード州を訪れた。

この訪問は、1964年の大統領選挙の前年の出来事であり、本稿の仮説である「アイルランドを訪問することで、アイルランド系アメリカ人の票を獲得することを目指していた。」を裏付けるタイミングであるとも捉えられる。しかしながら、次のようなケネディと側近の興味深いやり取りも記録されている。

ケネディの側近の一人であったケネス・オドネルは、ケネディのアイルランドを訪問前、「あなたはすでにこの国のアイルランド系の票をすべて獲得している。もしアイルランドに行ったなら、国民はただの行楽目的だと言うだろう。」と述べ、ケネディのアイルランド訪問への反対を表明した。それに対して、ケネディは「それはまさに私が望んでいることだ。」と応じている⁷。

実際、ケネディは1960年の大統領選において、表3が示しているようにカトリック教徒票の86%をすでに獲得している。さらに、ケネディがアイルランド出身のカトリック教徒であることは、1960年の大統領選挙以前から話題であり、アメリカ中が知っていることであった。

これらのことから、前回の大統領選挙においてアイルランド系アメリカ人の票の大部分を獲得しており、すでにアイルランド系であることをアメリカ中に知られていたケネディにとって、アイルランドを訪問することは、アイルランド系アメリカ人の票を獲得するためというよりも、大統領として祖先が暮らしていたアイルランドを訪問するという個人的な思い入れによるものであったと推察できる。

⁷ “Presidential Visits to Ireland, Irish America.”

<<http://irishamerica.com/2011/08/presidential-visits-to-ireland/>> (参照 2018/1/31)

5. 第37代リチャード・ニクソン大統領

1968年の大統領選挙に勝利したニクソンは、1970年10月にアイルランドを訪問した。アイルランド滞在中、妻の祖先の故郷があるアイルランド西部のメイヨー州と、彼の祖先の墓があるアイルランド東部のキルデア州を訪れた⁸。

ニクソンのアイルランド訪問は、「忘れられた」と形容されることが多い。アイルランド放送協会⁹が2010年10月2日に放送したニクソンのアイルランド訪問についてのドキュメンタリーのタイトルは *The Forgotten Visit* であった¹⁰。

アイルランド滞在中に祖先の墓などを訪問したニクソンは、一見すると、アイルランドに対して強い思い入れがあるようである。しかしながら、2010年12月10日付の『ニューヨーク・タイムズ』によれば、ニクソンはユダヤ人や、黒人、イタリア系アメリカ人と並んで、アイルランド系アメリカ人を軽蔑していた¹¹。

この記事は、ニクソン大統領図書館が2010年に公開した、ニクソン自身がホワイトハウスに設置した秘密の録音システムが記録した265分の録音の中で、ニクソンがマイノリティ集団を軽蔑していたことを報じている。その中で、ニクソンは「アイルランド系が卑劣であることを忘れてはいけない。私が知っているほとんどすべてのアイルランド人は、酒を飲むと卑劣になる。」と側近との会話の中で述べていた。

このことから、ニクソンは自身がアイルランド系であることを誇りに思っていなかったことが分かる。アイルランドへの訪問についても、1期目途中という大統領職への再選を狙ったタイミングで行われており、2期目では行われていない。

このことから、ニクソンのアイルランド訪問は、アイルランドへの個人的な思い入れに基づくものではなく、次期大統領選挙でのアイルランド系アメリカ人の票を獲得することを狙ったものであったと考えられる。実際に、表3でカトリック票の推移を見てみ

⁸ "Nixon's 'forgotten visit' to be recalled in documentary," *Irish Examiner*, October 2, 2010. <<http://www.irishexaminer.com/ireland/nixons-forgotten-visit-to-be-recalled-in-documentary-132406.html>> (参照 2017/02/08)

⁹ アイルランドの首都ダブリンに本部を置く公共テレビ・ラジオ局

¹⁰ "The Forgotten Visit," RTE <<http://www.rte.ie/radio1/doconone/2010/0923/646523-radio-documentary-forgotten-visit-nixon/>> (参照 2018/1/31)

¹¹ "In Tapes, Nixon Rails About Jews and Blacks," *New York Times*.

<<http://www.nytimes.com/2010/12/11/us/politics/11nixon.html>> (2018/2/2)

ると、ニクソンは1968年の大統領選挙ではカトリック票の33%しか獲得できていなかったのに対して、1972年にはカトリック票の52%を獲得している。

6. 第40代ロナルド・レーガン大統領

1980年の大統領選挙に勝利したレーガンは、1984年6月にアイルランドを訪問した。アイルランド滞在中、彼は祖先の故郷があるアイルランド中部のティペラリー州を訪れた¹²。

レーガンはティペラリー州での演説で、「今まで受けたどんな栄誉や贈り物よりも、今回の訪問を私は大事にするだろう。」と述べた。さらに、「この訪問は私の魂に安らぎを与え、長い旅を終えた後に自宅にたどり着いたかのような喜びである。」とまで述べている¹³。

しかしながら、1984年の大統領選挙直前というタイミングで行われたアイルランド訪問は、アイルランド票を獲得するためのアピールであったと指摘されている。彼の側近らは彼のアイルランド訪問がアイルランド系アメリカ人の投票行動へ与える影響に喜んだという¹⁴。さらに、彼のアイルランド訪問はアメリカのテレビでも生放送され、のちには選挙キャンペーンのコマーシャルでも用いられた。

これらから分かるように、レーガンは大統領選挙での自身の再選を確実にするため、アイルランドを訪問することで、アイルランド系アメリカ人の票を獲得しようとしていた。表3を見てみると、1980年の大統領選挙ではカトリック教徒の47%の票しか獲得できなかったレーガンだが、1984年の大統領選挙では61%のカトリック教徒の票を得ている。

¹² "President Ronald Reagan Visits Ancestral Home in Ballyporeen," RTE. <<http://www.rte.ie/archives/2016/1020/825635-president-ronald-reagan-visits-ballyporeen/>> (参照 2017/2/8)

¹³ "Presidential Visits to Ireland," *Irish America*. (参照 2018/1/31)

¹⁴ Dolan, Jay P. *The Irish Americans*.

7. 第44代バラク・オバマ大統領

2008年の大統領選挙に勝利したオバマは、2011年5月、アイルランドを訪問した。アイルランド滞在中、彼は祖先の故郷があるアイルランド中部のオフアリー州を訪れた¹⁵。

アメリカ史上初のアフリカ系に出自を持つとして世界的に知られるオバマは、同時にアイルランド系の祖先も持つ。オバマ自身もそのことを知ったのは、大統領選挙期間の2007年のことであった。しかしながら、それ以降、オバマは自身がアイルランド系の血を引いていることを様々なメディアを通して声高に主張し始める¹⁶。

オバマがアイルランドを訪問したのは、2012年の大統領選挙の前年のことであった。表3で2008年と2012年の大統領選挙を比べてみると、カトリック票の伸びはほとんどみられない。しかしながら、オバマは自身がアイルランド系の祖先を持つことを様々な場面でアピールしてきた。例えば、2012年の聖パトリックの日には、ワシントンDCのアイリッシュパブを訪問し、ギネスビールを飲んでいる¹⁷。

これらのことから、オバマは、アイルランド訪問など自身がアイルランド系であることをアピールすることで、大統領選挙でアイルランド系アメリカ人の票を獲得することを目指していたと考えられる。

8. 結論

本稿では、「国際政治上の影響力が弱く、通商上の重要性も低いアイルランドを、大統領が度々訪問し、わざわざ自身の祖先の故郷まで訪れるのはなぜだろうか。」という

¹⁵ "Why are US presidents so keen to be Irish?," *BBC News*, 26 April 2011.
<<http://www.bbc.com/news/world-us-canada-13166265>> (参照 2017/2/8)

¹⁶ "Barack Obama's Irish roots traced back to village," *The Telegraph*.
<<http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/barackobama/8528827/Barack-Obamas-Irish-roots-traced-back-to-village.html>> (参照 2018/2/2)

¹⁷ "President Obama at the Dubliner on St. Patrick's Day," White House.
<<https://obamawhitehouse.archives.gov/blog/2012/03/17/president-obama-dubliner-st-patricks-day>> (参照 2018/2/2)

問いに答えるべく、4名のアイルランド系を祖先に持つ大統領を分析することで、本稿の仮説である「大統領はアイルランドを訪問することで、アイルランド系アメリカ人の票を獲得することを目指していた。」の妥当性を検証してきた。

大統領のアイルランド訪問には、いくつかの共通点が見出せる。一つ目は、アイルランドを訪問した大統領は全てアイルランド系の祖先を持つことである。二つ目が、本論文で挙げている4名を含め、アイルランドを訪問した大統領6名全員が就任の1期目かつ、次期大統領選挙に極めて近いタイミングでアイルランドを訪問していることである。

この二点から、本研究で扱った大統領のうち、ケネディ以外の3名は、次期大統領選挙でアイルランド系アメリカ人の票を獲得するため、自身がアイルランド系であることを効果的にアピールする手段の一つとして、アイルランドを訪問していたと考えられる。一方で、ケネディについては、アイルランドへの個人的な思い出に基づいたものであった可能性がぬぐえない。

そして、大統領のアイルランド訪問が、実際にアイルランド系アメリカ人票の獲得につながったことは、ニクソンとレーガンが証明している。アイルランド系アメリカ人に絞った大統領選での投票データがないため、本研究では、アイルランド系アメリカ人が多く占めるカトリック教徒の投票データで代用した。それぞれの大統領を扱った章でも言及したが、Gallup社の世論調査を基に作成した表3は、カトリック教徒の大統領本選挙での投票先を示している。例えば、1968年の大統領選挙では、ニクソンはカトリック票の33%しか獲得出来なかったのに対して、1972年にはカトリック票の52%を獲得している。また、1980年の大統領選挙において、レーガンはカトリック票の47%を獲得したのに対し、1984年大統領選挙では、カトリック票の61%を獲得した。

確かに、大統領選挙は、再選率が高く、現職大統領の方が票を獲得しやすい。また、1期目に実行した様々な政策が与える影響も大きい。しかしながら、ニクソンやレーガンは1期目の大統領選挙と比べ、2期目の大統領選挙の方がはるかに多くのカトリック票を獲得しており、大統領のアイルランド訪問が影響を与えた可能性を指摘できる。

しかしながら、本研究には次の限界点が挙げられる。第一に、アイルランド系アメリカ人の投票データが入手できないため、カトリック教徒の投票データで代用したために、アイルランド系アメリカ人の投票行動を完全に分析しきることが出来なかったことである。第二に、アイルランド系アメリカ人コミュニティにおいて、各大統領がどのよう

に捉えられていたのかにまで踏み込むことが出来なかった点である。アイルランドをはじめとする大統領の外国訪問が内政に与える影響については、さらなる研究が求められる。

代	大統領	所属政党	代	大統領	所属政党
7	Andrew Jackson	DNC	28	Woodrow Wilson	DNC
11	James Knox Polk	DNC	29	Warren G. Harding	GOP
15	James Buchanan	DNC	33	Harry S. Truman	DNC
17	Andrew Johnson	DNC	35	John F. Kennedy	DNC
18	Ulysses S. Grant	GOP	37	Richard Nixon	GOP
21	Chester A. Arthur	GOP	39	Jimmy Carter	DNC
22, 24	Grover Cleveland	DNC	40	Ronald Reagan	GOP
23	Benjamin Harrison	GOP	41	George H. W. Bush	GOP
25	William McKinley	GOP	42	Bill Clinton	DNC
26	Theodore Roosevelt	GOP	43	George W. Bush	GOP
27	William Howard Taft	GOP	44	Barack Obama	DNC

【表 1】 アイルランド系に出自を持つ大統領一覧（筆者作成）

代	大統領	所属政党	訪問年	祖先の故郷を訪問
35	John. F. Kennedy	DNC	1963 年	○
37	Richard Nixon	GOP	1970 年	○
40	Ronald Regan	GOP	1984 年	○
42	Bill Clinton	DNC	1995 年, 1998 年, 2000 年	×
43	George. W. Bush	GOP	2004 年, 2006 年	×
44	Barack Obama	DNC	2011 年	○

【表 2】 アイルランド訪問をした大統領一覧（筆写作成）

大統領選挙	民主党	共和党	大統領選挙	民主党	共和党
1952 年	56%	44%	1984 年	39%	61%
1956 年	51%	49%	1988 年	51%	49%
1960 年	84%	16%	1992 年	47%	35%
1964 年	76%	24%	1996 年	55%	35%
1968 年	59%	33%	2000 年	52%	46%
1972 年	48%	52%	2004 年	52%	48%
1976 年	57%	41%	2008 年	53%	47%
1980 年	46%	47%	2012 年	56%	44%

【表 3】 大統領本選挙におけるカトリック教徒の投票先（筆写作成）¹⁸

¹⁸ "Election Polls-Presidential Vote by Groups," *Gallup*.
<http://www.gallup.com/poll/139880/election-polls-presidential-vote-groups.aspx>

9. 参考文献

西山隆行 (2016) 『移民大国アメリカ』 筑摩書房

Dolan, Jay P. *The Irish Americans*, Bloomsbury Press, 2010. "American Community Survey 5-Year Estimates," United States Census Bureau.

<<https://factfinder.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?src=bkmk>>

"U.S. Presidents with Irish Roots." *Irish Fireside*. <<http://irishfireside.com/wp-content/uploads/2010/08/PresidentialTrail.pdf>>

"Washington, Lincoln Most Popular Presidents: Nixon, Bush Least Popular."

Rasmussen.

<http://www.rasmussenreports.com/public_content/politics/people2/2007/washington_lincoln_most_popular_presidents_nixon_bush_least_popular>

Department of State. "Travels Abroad of the President, Office of the Historian."

<<https://history.state.gov/departmenthistory/travels/president>>

"Presidential Visits to Ireland", *Irish America*.

<<http://irishamerica.com/2011/08/presidential-visits-to-ireland/>>

"Nixon's 'forgotten visit' to be recalled in documentary." *Irish Examiner*.

<<http://www.irishexaminer.com/ireland/nixons-forgotten-visit-to-be-recalled-in-documentary-132406.html>>

"The Forgotten Visit." *RTE*.

<<http://www.rte.ie/radio1/doconone/2010/0923/646523-radio-documentary-forgotten-visit-nixon/>>

"In Tapes, Nixon Rails About Jews and Blacks." *New York Times*.

<<http://www.nytimes.com/2010/12/11/us/politics/11nixon.html>>

"President Ronald Reagan Visits Ancestral Home in Ballyporeen." *RTE*.

<<http://www.rte.ie/archives/2016/1020/825635-president-ronald-reagan-visits-ballyporeen/>>

BBC. "Why are US presidents so keen to be Irish?"

<<http://www.bbc.com/news/world-us-canada-13166265>>

"Barack Obama's Irish roots traced back to village." *The Telegraph*.

<<http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/barackobama/8528827/Barack-Obamas-Irish-roots-traced-back-to-village.html>>

White House. "President Obama at the Dubliner on St. Patrick's Day."

<<https://obamawhitehouse.archives.gov/blog/2012/03/17/president-obama-dubliner-st-patricks-day>>

Gallup. "Election Polls-Presidential Vote by Groups."

<<http://www.gallup.com/poll/139880/election-polls-presidential-vote-groups.aspx>>

